多義的な接続詞の記述に関する覚書—接続詞 as の用法を中心に—

佐藤嘉晃
京都大学大学院
smtosmtosmto@yahoo.co.jp

概要：接続詞 as は「様態」、「時」、「理由」など様々な用法を表すことができる多義語として知られており、こうした互いに相当程度に異なる性質の用法を複数表すことが可能なため、これら用法に共通して存在する特徴は何か、という問いに答えるための試みがいくつかなされてきた。しかしながら as が表す個々の用法に焦点をあて、その用法にどのような特徴がどれほどあり、どのような状況において使用するのが適切であるのか、ということを十全な形で詳細に論じた研究はほとんどないに等しい。本稿では、接続詞 as が様々な状況で使用される際、それぞれの状況において、適切な使用を可能にしている知識にはどのようなものが存在しているかを、今後、具体的に明らかにしていく上での下地を素描する。

キーワード：多義語、接続詞、認知文法、用法基盤モデル、as

1. はじめに

多くの接続詞はその形式に複数の用法を兼ね備えている。例えば、接続詞 while は主節と従属節二つの出来事の関係について「時」を表す場合に加え、「譲歩」や「対照」を表す際にも使用される。同様に、since も「時」を表すこともあれば、「理由」も表すことが一般に知られている。また、よりきめ細かい次元においては、「理由」を表す接続詞 because は、因果的な理由そして推論的な理由のどちらを表す場合でも使用される[1]。

こうした接続詞は用法だけでなく品詞的にも豊かである場合があり、 since は接続詞の他にも前置詞や副詞として使われたり、while は名詞として機能したりする場合もある。as という語もまさにそのような特徴を持っており、(1a) に示されているように副詞としての働きや (1b) のように前置詞としての働きもする。

(1) a. He's gone in the opposite direction just *as* fast.
b. *As* a teenager, Mohammed joined the Izzedine al Qassam Bridgades….

(COCA)

[1] 接続詞 because に関する様々な 事実やその説明、そして接続詞 since や for との比較などについては、Rutherford (1970), Sweetser (1990), 中右 (1994), 廣瀬 (1999)、そして最近では Kanetani (2019) を参照。

© 2019 Yoshiaki Sato. All Rights Reserved.

複数の用法を持つという意味では、(2a-d) に順に示すように、接続詞 as は「様態」、「補足情報（コメント）」、「時」、「理由」を表す際に使用され、辞書によってはさらに多くの細かな用法が挙げられていることもある (cf. OALD, Cobuild, ジーニアス英和大辞典、新英和大辞典)。

(2) a. …she was crying *as* kids do….
b. *As* you know, I am a dedicated professional folklorist….
c. She gasped *as* the water hit her.
d. … majority of scientists back the theory *as* this theory is supported by the overwhelming evidence.

(COCA)

これらの例だけからでも分かるように、接続詞 as はかなりの程度性質の異なる用法が複数存在している。こうした興味深い多義的性質の為に、この語の特性や分布の記述、そして理論的な分析などが試みられてきた[2]。

本稿の目的は接続詞 as が持つ用法をどのように記述していけば英語母語話者が持っているような as の知識（または英語母語話者に同等かそれに近い as の知識）を得られ、適切な使用が可能になるのかという、（解釈側でなく）使用者側の観点から as の意味について迫るものである。いわば、接続詞 as の用法の適切な使用を可能にする記述の仕方の素描にその焦点がある[3]。したがって、本稿は次節で概観するような、接続詞 as の多義的な用法に共通する一般的な特徴の分析の是非を直接論じたり、その代案を提示したりするものではない。むしろ、使用者の観点からみて、これらの特徴づけやその基盤となっている多義性の見方と、実際の使用者に必要とされるであろう as の使用の知識の関係性を考察し、効果的な as の用法の記述法に目を向けていきたい。

本稿の構成は以下の通りである。2 節ではこれまで考えられてきた接続詞 as の多義的な用法に対する扱いを概観し、続く 3 節ではそうした分析によって生じた as の特徴は、使用者側の観点を取り入れると、どのような位置を占めていると考えることができるのかを述べる。そして as を適切な形で使用する為にはどのような用法をどのような形で知識として備えている必要があるかを検討する。4 節は結論である。

---

[2] 管見の限り、詳細で広範囲に渡る接続詞 as の用法の記述は見当たらないが、Declerck (1991), Quirk et al. (1985), Swan (2017), Thompson and Martinet (1986) などにある記述や例文は参考になる。特徴・分析に関しては、Broccias (2006), Morris (1996), 河原(2011), 古賀(1999), 花崎 (2010, 2011) などが存在している。

[3] as の用法の詳細な記述やその理論的分析に関しては別の機会に記したい。

2. 接続詞　as の複数ある用法の捉え方

前節で述べたように、接続詞 as は非常に多くの用法を表すことができるため、そうした as の複数の用法の根底に（共通して）あると考えられる as の一般的な特徴の解明が試みられてきた。この節では接続詞 as の意味に対してどのようなアプローチがこれまでなされてきたのかを具体的に概観する。

花崎 (2010) では、(3a-d) に順に示されているように、as が表す「時」、「理由」、「条件」、「譲歩」の用法に焦点が当てられ、以下のような一般的な特徴づけがなされている。

(3)　a. He came up to me *as* I was speaking.
　　b. Young *as* he was, it is not strange that he should have acted so foolishly.
　　c. Pan American's office on the left *as* you enter the driveway that leads to….
　　d. Young *as* he was, he passed with flying colors.

(花崎 2010: 70)

接続詞 as は、意味としては「同時性」というコアを持つ。そしてこのコアに加え、「事態間読み込み」[4]という人間の認知能力によって複数の用法を推測している。ここで注意したいのは、上記の「時」、「理由」、「条件」、「譲歩」というような用法が存在することは認めているが、これらの用法は as 自体が持つ「意味」ではなく、「事態間読み込み」の結果の産物であると考えている点である[5]。

似たような考え方は Morris (1996) においてもみられる。Morris は接続詞 as の「時」と「理由」の用法の特徴を考察して、これらの用法を表す事例は主節と従属節の出来事に時間的な共通性・重なりがあるなど幾つかの特性を共有しているため、as が個別に「時」や「理由」を表しているのではなく、単に、談話上で連続的に表示される二つの出来事が同時に知覚されていることを指す連結的役割の as が存在しているのだけなのだとしている[6]。したがって「時」と

---

[4] この「事態間読み込み」という語を分かり易くいえば、主節と従属節の関係性をこれらの節の内容や文脈から推論する、ということである。

[5] この as のコアである「同時性」は、上記の四つの用法のコアにはなりえても、接続詞 as の用法全体のコアとはなっていないことには少しばかり注意を払うべきであろう。例えば以下の文において、接続詞 as は「様態」(as の用法の中でも非常に典型的な用法) を表している。

(i)　… a lot of people would have reacted *as* you did.　(COCA)

この文では、as 節において「あなたが反応した」という出来事と主節の「多くの人が反応したであろう」という出来事は、これらの両節の時制が示すように同時性の関係にはない。

[6] Morris は「時」と「理由」が独立した意味的な単位をなしてはいないと考えているが、これらの用法で解釈される際のそれぞれの as 節や as の特徴の記述は有用であるということに間違いはないということは、加えて述べておかなければならない。

「理由」の区別は as 自体が行うのではなく、両節の出来事の関係性の捉え方と as によって可能になるのだとしている。

河原 (2011) では接続詞 as が表す「時」、「理由」、「様態」、「逆説」[7]、「比較」[8]などの語義[9]に一般に共通する特徴として主節と従属節を「(ゆるい) 等価」で結び付ける機能があると提案されている。具体的には接続詞 as は数学における関数を表示し、それぞれの出来事 (主節と as 節) を等価に結びつける働きをするという。より正確に言えば、(主節と as 節の) 二つの出来事が二つのパラメターに代入されるとその出来事の様相に応じて、as は様々な用法を生成することができるということである。例えば、(4) の「時」の例では「話者がその部屋にまさに入る時に、拍手が起こった」というような内容を表しているが、主節と as 節の出来事がこの場合、同時生起しているため、その点で等価関係により結び付けられ、「時」の意味が生じるとしている。

(4) *As* I entered the room, applause broke out. (河原 2011: 15)

また、出来事同士が「等価」によって結びつけられる際に静的な出来事同士であれば「理由」の意味が生じる[10]としたが、このような状況でも 、(5) からわかるように、主節と従属節の出来事は時間的に共通性があるため、この場合も出来事同士が等価で結ばれていると主張している[11]。

(5) She watered the flowers *as* they were dry. (河原 2011: 18)

最後に佐藤 (2019)[12] では認知文法 (cf. Langacker 1987, 1988, 1991, 1999, 2008) の枠組みに従

---

[7]「譲歩」の意味におおむね対応する用語。

[8] 以下のような例に対応する用語。

(i) Jane is as healthy *as* her sister. (河原 2011: 23)

この文の二番目の as が当該の例である。

[9] 河原は上記の用法を語の「意味」として認めているようであるが、明確な「意味」の定義は本文中ではなされていない。

[10] 動的な出来事同士では「時」を表すとした。

[11] (5) の主節は静的な出来事ではないので、主節の出来事が静的であると指定は必要でないように思われる。

[12] 佐藤 (2019) の論は、個々の用法は接続詞 as の多義ネットワーク内の節点を形成しており、これらの用法は話者の確立した知識であることを前提としている。したがって、これらのより上位の節点 (i.e.共通する抽象的要素) が as の一般的特徴を形成しているわけだが、この上位節点だけが as の語の意味であるというわけでは決してなく、上位節点を含むネットワーク全

いベース、プロファイル、ドメイン、スキーマなどの理論的構築物 (theoretical constructs)[13] を用いて、先行研究よりもより適切・十全な形で接続詞 as[14] の包括的な一般的特徴づけが試みられた。具体的には、以下のような流れである。接続詞 as は出来事自体または出来事の展開・関係性に関連するいずれかの（ベーシックまたはアブストラクト[15]）ドメインを喚起させる。このドメインのもとで lm[16] (i.e. 従属節の出来事の内容) は解釈の強制を受ける。次にその lm が tr (i.e. 主節の出来事の内容) の基準や背景として機能し、lm に関連した一種の（アドホックまたは慣習的）カテゴリー (i.e. 特定のメンバーが集合する領域) または lm 自体がそうしたカテゴリーとしてその場で形成される。こうした状況下で接続詞 as は、「lm または lm に基づくドメインと tr の間に部分全体関係または一致関係を結ばせる」という一般的特徴（スキーマ）があると提案している。

例えば、as によって「様態」の用法が表されている (6) のような例でこの一般的特徴を考えてみる。

(6)　…she was crying *as* kids do….　(= (2a))

(6) は「子供が泣くみたいに彼女は泣いていた」という内容を表す文である。まず as によって（抽象的な）様態ドメインが喚起されると、as 節の出来事 (i.e. lm) は出来事そのものではなく、出来事の行為の様態として（意味的な）強制を受ける（これは主節の出来事 (i.e. tr) に対しても同様に当てはまる）。そして as 節によって子供の泣き方という詳述化された様態ドメインが形成される。個々の子供の泣き方に共通してみられるような特徴の集まり (e.g. 大きな声を出して喚く、顔をぐしゃぐしゃにする) は既に慣習化し一つのまとまりをなす知識として蓄えられていることが想定されるので、こうした様態の知識がドメインとして機能していると考えら

体の構造が as の意味であり、個々の用法は文脈からその都度導かれるわけではなく、安定した知識として存在しており、特定の条件が満たされた（刺激された）場合に特定の節点（用法）が活性化される (cf. Langacker 1987) と考えている。

[13] これら理論的構築物の詳細な内容は Langacker (1987, 2008) を参照していただきたいが、簡単に述べると、ある言語表現を理解する（特徴づける）上で背景的な役割を果たす諸領域 (e.g. 空間、時、色、音) をドメインと呼び、その表現を理解するのに必要なドメインが集まったものがベースである。このベース内で言語表現が指示しているもの (i.e. 注意の焦点) をプロファイルと呼ぶ。スキーマとはいくつかの言語表現それぞれに内在している共通の構造を意味する。

[14] 正確には節を従える as 全般 (i.e. 接続詞だけでなく関係詞も含めた as) の特徴付けを行った。

[15] ベーシックドメインとはそれ以上還元できないドメイン (e.g. 空間、時、色) のことをいい、アブストラクトドメインとは複合的なドメインが一つのドメインとして機能しているドメイン (e.g. 身体部位、家族関係、スポーツのルール) のことをいう。

[16] lm とは、ある（関係を表す）言語表現がプロファイルする中で二次的な際立ちを有するものを指し、tr はその中で最も高い際立ちを有するものを指す。

れる。こうして作られたドメインのなかに彼女の泣き方もそのメンバーとして含まれるとしてカテゴリー化される。

よりこうした関係を鮮明にみてとれるのは (7) のような「補足情報（コメント）」の用法である。

(7) *As* you know, I am a dedicated professional folklorist…. (= (2b))

「補足情報（コメント）」という用法は主節の出来事に直接関わりのない補足的な情報を as 節によって提示するものと特徴付けられており、(7) は「あなたも知っている通り、私はひたむきな民俗学者である」という内容を表している。ここでは as 自体は出来事の情報領域に関わるドメインを喚起させる。そしてその中の具体的なドメインが as 節 (lm) によって示される。この場合、（話者が想定する）聴者の知識領域というドメインである。そしてこの as 節によって形成されるドメイン内に主節の出来事の情報 (tr) が存在しているという構造を表している。したがって、ここでもこの領域全体を表す lm と、その内部に部分として存在している tr が部分全体関係をなしていると捉えることができる。このようにして「時」や「理由」などの他の用法も同様に分析でき、こうした全ての用法にここで提案されている一般的特徴が当てはまるとしている。

3. 適切な接続詞 as の使用にむけて

この節では様々な用法を表すことができる接続詞 as の適切な使用という観点から、前節でみた as の特徴づけと実際の使用に密接に関係する（言語使用者の）知識の関係性に触れながら、個々の用法に関する具体的な知識とそこから導き出される下位レベルの抽象的知識の重要性を考察する。具体的には 3.1 節でまず、言語の使用者側から言語表現の意味を考えるという方法論的な導入を提示し、3.2 節において 2 節で概観した as の一般的特徴に言及しながら、この見方を as に適用して as の効果的な意味記述にむけた考察をおこなう。

3.1 言語の使用者という視点からみる語の意味

ある語の意味を知っているとは、その語の適切な使い方を知っていなければいけないという考えを平沢 (2019) は全面に押し出し、この考えの妥当性を一貫して提示している。平沢は前置詞 by をとりあげ、この語にあてはまるとされる抽象的（一般的）な特徴づけをしたところで、適切な by の使用にはつながらないことを豊富なデータとそこから見出される特徴をもとに導き出している。例えば、「時」を表す by の用法の場合、by の用法に「時」の用法があるということを知っているだけでは、当然のことながら、この「時」の用法を使いこなせることにはならない。by の他にも in, over, at など様々な前置詞もまた「時」の用法を持っているから

である。したがって (8) に見られるような「時」を表す by にはそれ独自の用法を定める必要性がある。

(8)　*By* ten o'clock, however, he still hadn't made a move for the front door.　(平沢 2019: 60–61)

平沢によると、こうした「時」の by には時間軸を by の補部で示される時間 (上の例では 10 時) よりも前から目で追っていき、その時間で目をとめて、その時どのような状態がなりたっているのかということを示す機能があるとしているが、この記述だけでは適切な by の「時」の用法を使いこなせることにはならないという。上記のような一般的特徴に加え、それを可能にしたいくらかの具体的な特徴 (i.e. 具体的な言語表現がコンテクストとも相互作用して表す意味内容) も併せて知っていなければ、そうした抽象化は可能にならないからである。

さらにこの by の補部に特定の語彙項目が生起する場合、「時」の by の一般的特徴とその補部の語の意味を知っているだけでは適切な使用は可能にならない。(9a) のように by の補部に now が入った場合、発話時よりも前から時間を目で追い、発話時に成り立っている状態を表しているだけでなく、時間経過に伴って何か（この場合、傷の治癒の度合い）が高まっていくことが必須の条件となる。

(9)　a. The wound should have healed *by now*. (… but I'm not sure)
　　b. *By nine o'clock* the phone was still silent.
　　c.**By now* the phone should still be silent.

(平沢 2019: 83, 94)

これは他の時間補部にはない特徴で、(9b) では時間が経過し、その補部で表される時においても電話がならない状況が変わらず継続している状況を表しているものだが、この補部を (9c) のように now に変えてしまうと容認されなくなってしまうのは、まさにこの「高まり」といった特徴が by now という表現に固有の特徴でその使用において知っていなければいけない知識の一つであることを示している。このように、平沢は語の適切な使用という観点から語の意味に関して取り組んでいる。

3.2 接続詞 as の用法の効果的な記述にむけて

接続詞 as の適切な使用を可能にする用法の記述にも前節で概観したようなその用法独自の具体的な知識を明らかにする必要がある。使用者のそのような知識は一体どのように形成されるかということについては、用法基盤モデル (cf. Langacker 1988, 1999) をここでは採用する。用法基盤モデルとは、話者の言語知識は実際に経験する言語表現をもとにして、そうした言語

表現を繰り返し経験することによって類似した意味・形式を知覚し、一連のカテゴリーを形成していくボトムアップ式の言語習得モデルである。

Langacker (1999) で述べられている動的な用法基盤モデルに関する内容をここでの議論に沿う形にして、より細かく捉えると以下のようなものになるであろう。はじめに、例えば、ある語 (A) がある文脈 (C_1)[17] で使われ、ある用法 (U_1) を表しているとする。そしてこの語が同じような文脈と用法で使用されているのを繰り返し経験し、それらに共通する類似性を感じ取ることによって、人はその語の意味を確立させて知識として習得していく。注意すべきは繰り返し経験することによって、文脈や用法はある程度の抽象化を必然的に被るということである。そのような抽象化がなければ、全ての経験は個々に別個のものとなり、そうした経験に類似性を認識してカテゴリーを形成することがなくなってしまうからである。

典型的に捨象される文脈はその語が実際に使われた場所と時間であると考えられる。なぜならそれらが緊密に語の用法と結びついてしまっていたら、その語が使われた場所と時間が正確に同じでなければその用法を表せなくなってしまうが、そうした状況は非常にまれであると考えられるからである。

そして、このようにして一定の抽象化を経て、言語使用者の知識の一部として出来上がった語と用法のペアを F-U_1[18] とする。このペアこそが、ある用法の具体的な知識を構成していると考えられる。例えば、(10a) や (10b) のような類の例を繰り返し何度も経験することによって、as はある瞬時的な出来事が起こり、その直後に別の出来事がすぐさま発生する場合、前者の出来事を as 節で、後者の出来事を主節によって表し、これら二つの出来事の発生の（眼前として起きているようなまたは緊迫性を伴うような）動的性を描写する意味合いを含んで使用されるのであるという具体的な知識[19]を獲得することになるであろう。

(10) a. *As* I entered the room, applause broke out. (= (4))

b. She gasped *as* the water hit her. (= (2c))

同様にして、別のペア F-U_2 も (11) のような例を基にして形づくられ、この場合、as はある

---

[17] 文脈には言語的知識と言語外知識の両方を含むものとする。

[18] 便宜的に用法と形式のペアの中に関連した文脈的な知識 (i.e. C_1) が含まれるものとする。より正確にいえば、これらのペアと文脈は明確な境界を引くことができず不可分の関係にあるといえる（注意すべきは、ここで指示している「文脈」は言語使用者の知識の一部として確立した要素であり、その場だけのアドホック的な文脈とは異なるということである）。これを形式的に表すのであれば、$\boxed{\text{F-U}_1}_{C1}$ のように表示してもよいかもしれない。

[19] さらなる特徴がこのペアに存在するがここでは省略する。したがって、これだけでは十分にこの場合の用法の具体的な知識を構成しているとは言えないことに注意されたい。本文の以降の例も同様である。詳細な記述は機会を改めたい。

継続した出来事の中で、ふいに突発した出来事が生じる場合に使用され、前者の出来事を as 節によって、後者の出来事は主節によって表すのであるという知識を獲得する。

(11)　a. He came up to me *as* I was speaking.　(= (3a))
　　b. *As* he was walking all of ten feet to his bedroom, his cellphone buzzed.　(COCA)

(10) や (11) に関連した具体的な知識がなく、as 節の出来事は主節の出来事よりも先に起こる状況を表す際に使われるという知識しかなければ、例えば、ジョンが石を手につかんで、そしてそれを投げて、それがグラスに当たった結果、そのグラスが割れたというような状況下で言語使用者は誤って、(12) のような極めて不自然な文を作ってしまう可能性を完全には排除できない。

(12)　**As* John grasped a rock with his hand, the glass broke.

それというのも 当該の状況下では as 節の出来事は確かに、主節の出来事よりも後に起こっているからである。

これら二つのペア (i.e. F-U_1 と F-U_2) に同じ時間的側面が関与していると言語使用者によって認識されると、これらの知識に共通する情報を抽出してより高次な (i.e. 抽象的な) スキーマ S_1 が形作られる。この段階のスキーマをいわゆる「時」の用法と呼んでもいいかもしれない。しかし、注意すべきことは、この段階のスキーマは使用者の知識として（上記の二つのペアとは）別個に蓄えられているとしても、この知識だけで (10) や (11) に表されている状況を使いこなすことは到底できないであろう。

以上、観察したように、接続詞 as はただ単に「時」を表すという知識だけでは不十分なことはもちろんのこと、as 節の出来事の後に主節が起きるというような幾分具体的になっただけの知識でも適切な使用は可能にならないことが分かる。

そうすれば、予め知っておかなければ、適切な使用が可能にならない（ある程度の抽象化は受けているが）具体的な知識はそれぞれ、最下層とはいかないまでも、それに近いレベルでの低次 (i.e. 具体的) なスキーマで構成されているといえる。したがって、このレベルでの個々のスキーマが as という語を適切に使用可能にする知識として最も重要であると考えられる[20]。

また別の状況では、 (13) のような例を繰り返し経験し、F-U_3 というペアを確立し、as は話者にとって既になじみ深い出来事・内容が原因となって、主節の出来事が結果として起きてい

[20] このように考えれば、意味が豊富だと考えられている内容語との対比としての語である機能語の意味もまた非常に豊かなものであると考えられる。

るのだと推論して理由づけている状況に使用され、前者を as 節、後者を主節によって表すのであるという知識を得る。

(13) a. … majority of scientists back the theory *as* this theory is supported by the overwhelming evidence. (= (1d))

b. She watered the flowers *as* they were dry. (= (5))

この低次のスキーマからさらに抽象化し、as は「理由」の用法を表すのだという、より高次のスキーマが抽出されることも「時」の用法と同様に不可能ではないが、この場合、適切な使用に関して明確な制限が存在している。it 分裂構文の焦点は客観的な命題内容に限られる (中右 1994: 155-164)) という特性があり、(14) のように、 客観的な因果関係を because は表すことができるが、対照的に as はそのような使い方はできず、話し手の主観的な推論による理由説明しか表すことができないからである。

(14) It is {*because*/**as*} he helped you that I'm prepared to help him. (中右 1994: 162)

したがって、そのような高次のスキーマが知識として存在していても、言語使用者が使用の際に参照している (Langacker (1987, 1999) の用語に従えば、より際立ちの高いノードとして存在し、それが活性化される) のは具体的な特徴と使用の知識を含んでいる低次のスキーマだと証拠をもっていうことができる。

このようにして、(15a, b) にみられるような状況も、繰り返しの類似の経験により、適切な使用を可能にする具体的な知識を構成する低次のスキーマを個々に形成し、場合によってはさらに「様態」や「補足情報（コメント）」というようなより高次のスキーマが出来上がる。

(15) a. …she was crying *as* kids do…. (= (2a))

b. *As* you know, I am a dedicated professional folklorist…. (= (2b))

このようなより高次のスキーマをさらに統括するようなスキーマが前節で概観した as の統一的な特徴付けに対応するものとなるであろう。当然のことながら、このようなスキーマが言語使用者の知識の一部を実際に構成しているとしても、実際の使用に重要な働きをなしているとは考えづらく、使用の観点からは低次のスキーマの適切な記述こそが効果的に as を使いこなす道筋であると考えられる。

さらに、こうした見方は個々の用法の適切な使用に関する特徴付けを可能にするだけでなく、使用の制限もまた説明できる可能性も残されている。例えば、(16) のように as 節の述部の性

質によって容認不可となってしまう文に対し、as の一般的特徴なるものを措定して、そこから容認不可となっている答えを演繹的に導いていくのではなく、実際にこのような主節に対して補足的な情報を付加する働きをしている実例のうち、(高頻度で起きる) 典型的な例またはそうした例の集まり（クラスター）によって形成された使用上の特徴 (i.e. 低次のスキーマ) にかみ合わない性質が表現されているため、容認不可となっていると考えることができる[21]。

(16)　a. She has married again, *as* was {expected/*unexpected}.
　　b.*She has married again, *as* was disgraceful.

(Quirk et al. 1985: 1117)

同様に (10)、(11)、(13) のような状況それぞれから導き出される、具体的な個々の低次のスキーマに（意味的な）ずれが生じるような状況の場合、as の使用が制限され、容認性が下がるもしくは容認不可になることが予測される。したがって、具体的な用法毎に適切な使用の知識を記述することにより、その使用の制限もまたそうした記述によって暗示される可能性があり、こうした記述の仕方は今後の具体的な研究の土台となると考えられる。

4. 結語

本稿では、従来のような接続詞 as が表す多義的な用法の統一的な説明を試みるのではなく、複数の用法を個々に適切な形で使用するのを可能にする具体的な知識を個別かつ詳細に明らかにすることが、複雑な as という語の意味を明らかにするより良い方法の一つであるとして、今後の研究の方法論的基礎を素描した。より具体的に言えば、繰り返しの経験から導き出される低次のスキーマが接続詞 as の適切な使用や制限を可能にする重要な位置を占めている可能性があることを示した。さらに推し進めて言えば、こうした低次のスキーマには、3 節で示唆されているように、出来事に関する（話者の思考や認識を時に含み反映している）状況的な知識が多分に含まれており、こうした知識の微妙な差異によって接続詞がもっぱら使い分けられている可能性も十分に考えられ、多義的な接続詞自体の使用に関わる知識や似た意味を表す接

[21] Bybee and Eddington (2006) はある動詞が選択する形容詞の種類は類似した具体的な意味のグループを形成し、慣習化されていない形容詞が選択された場合、そうしたグループの特徴やグループ内に生起する個々の形容詞で高頻度なものに基づいて、容認性が判断されている可能性を指摘した。したがって、as の場合も同様に、そうした低次のスキーマが使用の制限の引き金となっていると考えることができる。しかし、付け加えておかなければならないのは、高頻度で生じる典型例やその集まりに共通している特徴は、たまたまそうした特徴を持つ具体例が高頻度で集まったため、そうした制限ができているのか、または as という語に存在する特徴と相性が良いために、結果としてそのような制限を形成しているのかは、詳しく調査されなければいけない。

続詞同士の相違の記述に貢献する見通しもある。今後、こうした土台を基に、個々の具体的な用法を使用可能にしている具体的な知識 (i.e. 低次のスキーマ) を明らかな形で提示し、接続詞 as の意味の全貌を徐々に明らかにすることが期待される。

参考文献

Broccisas, Cristiano. 2006. The construal of simultaneity in English with special reference to *as*-clauses. *Annual Review of Cognitive Linguistics* 4, 97–133, Amsterdam: John Benjamins.

Bybee, Joan and David Edington. 2006. A usage-based approach to Spanish verbs of 'Becoming.' *Language* 82: 323–355.

Declerck, Renaat. 1991. *A Comprehensive Descriptive Grammar of English*. Tokyo: Kaitakusha

Kanetani, Masaru. 2019. *Causation and Reasoning Constructions*. Amsterdam: John Benjamins.

Langacker, Ronald W. 1987. *Foundation of Cognitive Grammar* vol. 1: *Theoretical Prerequisites*. Stanford: Stanford University Press.

Langacker, Ronald W. 1988. An usage-based model. In Brygida Rudzka-Ostyn (ed.), *Topic in Cognitive Linguistics*, 127–161, Amsterdam: John Benjamins.

Langacker, Ronald W. 1991. *Foundations of Cognitive Grammar,* vol. 2: *Descriptive Application.* Stanford: Stanford University Press.

Langacker, Ronald W. 1999. A dynamic usage-based model. *Grammar and Conceptualization*, 91–146. Berlin: Mouton de Gruyter.

Langacker, Ronald W. 2008. *A Cognitive Grammar: A Basic Introduction*. Oxford: Oxford University Press.

Morris, Lori. 1996. Time and cause in the English connector *as*. *The LOCUS Forum* 23: 417–428.

Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech and Jan Svartvik. 1985. *A Comprehensive Grammar of English Language*. London: Longman.

Rutherford, William. 1970. Some observations concerning subordinate clause in English. *Language* 46: 97–115.

Swan, Michael. 2016. *Practical English Grammar* (4th edition). Oxford: Oxford University Press.

Sweetser, Eve. 1990. *From Etymology to Pragmatics: Metaphorical and Cultural Aspects of Semantic Structure*. Cambridge: Cambridge University Press.

Thompson, Audrey Jean and Agnes V Martinet. 1986. *A Practical English Grammar* (4th edition). Oxford: Oxford University Press.

河原清. 2011.「英語 "as" の多義の構造：接続詞の意味」『文化女子大学紀要』19: 13–28.

古賀恵介. 1999.「As の意味論」稲田俊明・水光雅則・大庭幸男・西村秀夫（編）『言語研究の

潮流』97–110. 東京: 開拓社.

佐藤嘉晃. 2019. 『従属接続詞の多義構造—共時的かつ通時的視点から—』京都大学大学院 人間・環境学研究科　修士論文.

中右実. 1994.『認知意味論の原理』東京：開拓社.

花崎美紀. 2010.「事態間読み込みという観点から見る as の意味論」『信州大学人文科学論集　文化コミュニケーション学科編』44: 65–75.

花崎美紀. 2011.「間主観性の観点からみる as の意味論」武黒麻紀子（編）『言語の間主観性：認知・文化の多様な姿を探る』19–40. 東京：早稲田大学出版.

平沢慎也. 2019. 『前置詞 by の意味を知っているとは何を知っていることなのか—多義論から多使用論へ』東京：くろしお出版.

廣瀬幸生. 1999.「文法の基本単位としての構文—構文文法の考え方—」『筑波大学「東西言語文化の類型論」特別プロジェクト研究報告書』平成 10 年度 II, 591–610.

辞書・コーパス

Cobuild

OALD (Oxford Advanced Learner’s Dictionary)

新英和大辞典

ジーニアス英和大辞典

COCA (The Corpus of Contemporary American English)

A Note on How to Effectively Describe Polysemous Conjunctions: With Special Reference to the Conjunction *As*

Yoshiaki Sato

The conjunction *as* is known to be a polysemous item which has various kinds of usage such as manner, time, and reason. The main approach generally taken has been to discover the nature of *as* that is common to (or generalizes over) every usage of this word, and therefore little attention has been paid to the specific properties of each usage (i.e. subtle, but semantically/pragmatically important information for use). This paper, therefore, attempts a first rough sketch of what is needed to be able to use *as* properly in terms of language users' perspective. Adopting usage-based model (cf. Langacker (1988, 1999)), which can explain how we learn to use words effectively, we can say lower-level schemas (possibly, ones near the lowest-level schemas) respectively constitute detailed information of each usage which enables us to use it effectively. In particular, they provide not only detailed characteristics of each usage, but also imply its restrictions on use. This sketch will give a descriptive foundation for the future study.